

金曜の会報告

期 日 2020年1月10日

場 所 倉敷労働会館

参加者 4名 (O、TA、AK、AR)

内容

記録「プラタナスの木」(AR)

映像「あいしているから」(AK)

まずは、記録をとりながら感じたことですが、解釈が十分なレベルでないと感じて、自分ができる範囲で割り切って、その中で何をするかを考えなくてはいけないと思いました。十分な解釈ができていないからといって悶々とし、具体的な授業の中身(どの問題で何をするか、何を切るか)を考えないまま授業してしまう。そうすると、教師自身が関係のないところへ迷走してしまう。初戦は、自分の力量に応じたことしかできないので、自分にできるベストをつくすためにも、どこかで割り切らなければならないと感じました。

また、質の低い(どう考えても大問題に繋がりそうにない問題)が出てくることも課題だと感じました。それには、やはり振り返りをきちんとして、価値のある問題とそうでない問題をはっきりさせていく必要があると思います。授業がダラダラと長くなり、ついこの部分を時間に押されて省略しがちですが、年度初めの段階で、1回の授業の内容を絞って、その範囲できちんと価値のある問題とそうでない問題を振り返る。こうした、取り組みが必要ではないかと感じました。

また、記録を検討して「具体的なイメージ」が、キーになってくると感じました。結局、文学教材の授業の目的は、文章から具体的なイメージをつくること。その結果として、イメージが変わる。ならば、教師は具体的なイメージが子どもから出てくるように仕向けなければならないし、具体的なイメージを出してきたときに、それを取り上げて膨らませなければならない。そう思いました。

AK学級も、問題の質という点で、ARと同じ課題をかかえています。それは、取り入れる手法でも助長されていました。問題づくりの際に、はじめに文節に区切ってしまい、一つの文節・単語で問題をつくらうとしたため、大問題に関係のない問題を子どもが無理やりつくっていました。まずは、文の中から、「なくてもいい」「言いかえられる」言葉を探す。それで、解決できなかったときに、文節に切ってみる。この手順でいこうと、確認しました。

まとめ

- ・自分の解釈が不十分でも、その範囲でプランを考えておこう。
- ・具体的なイメージに向かうようにしよう。
- ・はじめは文で問題づくり。それでダメなら文節に切ってみる。 文責（AR）

「あいしているから」は、ARさんがまとめてくださった課題の通りです。文節でわけて問題づくりをしたのは大失敗でした。ただ、この失敗を通して、どういうときにこのやり方を使えばいいのかが一つ分かりました。

授業の展開も教えていただきました。

版画は、YO先生、HA先生、西岡陽子先生（本を参考に）という先行実践に多く触れられたおかげで、順調に彫り進められています。これまでたくさん見せていただいて、会で見える視点を教えていただいていたおかげです。ありがとうございます。彫るガイドラインになるクーピー（チョーク）の線は、いい作品を子どもたちに見せながら描かせていこうと思います。また例会で見て教えてください。文責（AK）